



## 病院の再生を目指して・・・風を読み 風を掴む

事務局長 木村 司 郎

平成13年3月新病棟の完成により新しいステージに立った北海道社会保険病院の目指すところは、「患者を主体とした、質の高い医療サービスを効率的に提供します」と、病院案内に記載された。

良質な医療の提供は健全な経営の上に立つものと言われているが、古く狭いとはいえ350の病床を持ちながら、医業収益は250床の病院の平均にも満たない49億円弱の病院を、看板どおりの病院にするにはどうしたらよいのか？

平成11年度の決算分析から、81%の病床稼働率を10%、28,500円の1日当り診療単価を15%伸ばすことが出来れば300床病院の平均的収益60億円が確保でき、64%と異常に高い給与比率も境界ラインの50%に近づくことが推計された。

大きな赤字を抱え経営改善が急務である中、費用の削減策と、収益の増収策のいずれを優先するのかの選択に迫られたが、少々の削減策では短期間に累積赤字を解消するほどの効果は期待できない、縮小・削減は職員の士気に悪影響を及ぼすことが懸念される等々から、高度医療機器の導入および医療スタッフを確保して、収益の確保を最優先に経営改善を進めることとなった。

この結果、平成13年度の収益は、職員の努力と新病棟及び高度医療機器効果も相俟って15億円の増収を確保し、過去に経験したことのない経営成績を挙げて、名実ともに350床病院の仲間入りを果すことが出来た。

しかし、「競馬のし始めに大穴を当てた者は必ず破産する」というイギリスの諺がある。

当病院が、成功体験への埋没を回避して、真に「患者を主体とした、質の高い医療サービスを効率的に提供できる病院」となるにはもう少し時間がかかりそうであるが、職員の意識覚醒し、能力で評価するシステムを構築することにより、組織全体に緊張と反省を生じさせることが出来れば、風を掴むことが出来ると思う。

紀要の発刊を機に、ますますの精進を期待して止まない。



## 北海道社会保険病院紀要発刊にあたり

看護局長 朽木 恵 子

21世紀に入り、医療行政は過去と比べようもない速さで変化し、進んできました。北海道社会保険病院もこの変化の中で、平成13年3月に新築棟に移転し、病床利用率の向上、在院日数短縮、診療科の新設、高度診療機器の導入等々、急性期病院として大きな変化をとげました。平成14年度も病床利用率の向上、在院日数の短縮を維持しながら発展していこうと努力中です。各病棟の看護婦も、申し送りの改善・短縮にとりくんだり、看護記録の監査を行い、記録用紙の改善をはかり、より急性期に対応できるよう業務改善中です。また患者様の安全を守るための看護手順を、係長会が中心になり作成しましたので、年内には皆様にお届けすることができるのではないかと思います。看護職員全員が、この手順に基づいて実践し、患者様の安全が守られるよう取りくんでください。

病院の大きな事業として、平成15年には、病院機能評価をうける予定になっております。看護も多くの時間を使い改善すべきところがあるのではないかと思います。このような重要な時期に、北海道社会保険病院紀要が多くのかたの努力で発刊に至ったのだと思います。当院の活動内容が掲載されており、医務局の医師をはじめ事務局、看護局職員の努力のあらわれと思いますので、すみずみまで興味をもって読んでいただければと思います。看護局も、患者様に満足していただける看護をめざして実践し、多くの活動内容を紀要に掲載できるよう努力いたします。北海道社会保険病院の活動内容が充実して、第二巻、第三巻と発展していくこと願ってやみません。